

峰 万里恵 ファド・ライブ

## Asa de vento 風のつばさ

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

### 第 1 部

## 1. ちっちゃなマウムケール *Malmequer pequenino*

伝承歌詞 編：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*

曲：リカルド・ボルジュシュ・ド・ソウザ *Ricardo Borges de Sousa*

マウムケールは黄色い小さな花で、日本語の金盞花（キンセンカ）＝英語のマリゴールド＝にあたるものと、それにそっくりの別種の野草が、こう呼ばれます。この曲はたいへん有名な民謡らしく、たくさんの歌詞があります。アマーリアさんが好きな歌詞を選んで、ごく一部分ことばを変えて、1曲に編みました。メロディは、原曲より明るい別のもの（民謡調ではありませんが）にしました。この作者は、ポルトガル・ギターの演奏家で、1930年代にソロ（ギター伴奏）で名人芸を聴かせるレコードを録音しています。

ちっちゃなマウムケールが、ある日きれいなバラに言いました。「あなたが女王様にももらったからとって、そんなに偉そうにしちゃいけません」

風が揺らすポピーたち、あんたたちを見ていると飽きない。なんと美しいのだろう、知らず知らずのうちに素朴なままでいられるということは。

あんたを愛したゆえにわたしは神様をなくした。あんたの愛ゆえにじぶんをなくした。いまはひとりぼっち、神様もなく、愛もなく、あんたもなく。

あの女は罪を犯した。愛ゆえにファド歌いになった。ファドが彼女を、あんまり遠くまで連れて行ってしまったので、神様も彼女を見失った……。

\*最後の「ファド」ということばには、歌のジャンル名と「宿命」という両方の意味をもたせています。

## 2. ファド・ド・リジュボア（リスボン、清らかなプリンセス）

### *Fado de Lisboa (Lisboa casta princesa)*

作詞：アウヴァロ・レアーウ *Álvaro Leal* 作曲：ラウーウ・フェラオン *Raúl Ferrão*

エルシーリア・コシュタという女性歌手が、1931年に劇場ショーでうたい、大評判。この曲とともに彼女は最高のスターになったそうです。作曲者は、ポルトガル・ポピュラー音楽の最高峰のひとりで、非常に多作で、時代を超えて愛されている曲も数々あります。わりあい単純なパターンを組み合わせたメロディなのですが、どの曲にも、その曲の個性をつくるすてきなアイデアが隠されていて、忘れられない印象を与えます。歌謡曲づくりの天才ですね！ なお、この曲のタイトルは、古いプロのアーティストは、単に「リジュボア（リスボン）」と呼んでいたようです。後年は、上記カッコ内の題が、ほぼ定着しています。

リスボン、清らかなプリンセス。あなたは、王家のマントを恥ずかしそうに開く、清らかなキスとともに。

なんと美しいあなた、長く引きずるスカートの裾はタイジョ河の威厳。

たくさんの未知の土地を発見したリスボン、その土地の富が過去の栄光となった。王冠をいただいたリスボン、数々の英雄たちを育てた土地。

金色の午後には、日曜日闘牛。貴族たちが勇敢な血を誇り、愛のほほえみを受けた。

リスボン、名声の土地。アルファーマの美しさ、モウラリアの詩、古い街角には数え切れない魅力。

リスボンの7つの丘が、王女さまのサテンの襟飾り。そこは、すてきな家々がちりばめられた庭園。

そしていつの日か、あなたの胸にファドが宿り、生まれてきた。夢見る街の人々がうたう、わたしたちのファド。

## 3. このおかしな人生 *Estranha forma de vida*

作詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*

曲：アルフレード・マルスナイロ *Alfredo Marceneiro*

アマーリアさんが、わりあい若いころ書いた歌詞です。メロディは、大先輩のマルスナイロがつくった《ファド・バイラード》と呼ばれるものを使いました（細部はかなり直していますが）。マルスナイロは、

ファドをうたう男性の、時代を超えた最高峰で、アマーリアさん同様に、まったく他の追随を許さない「唯一の」アーティストです。ことばを宝物のように大事にして、詩の心の美しさ、豊かさを伝えていました。

神様の意思だった——わたしが、このように思いま  
どいながら生きているのは。そして、すべての「ア  
ィ！」はわたしのもの、わたしのサウダードも。——  
神様の意思だった。

なんという変わった生きかたを、このわたしの心は  
もっているのだろう。なくしてしまった命で生きて  
いる、だれか運命を変える魔法の杖をあげればよいのに  
——なんという変わった生きかた！

ひとり立ちしている心、わたしの命令をきかない心。  
おまえは人々のなかで道をなくして生きている、かた  
くなに、血を流しながら——ひとり立ちしている心。

わたしはこれ以上おまえについていかない。生まれ、  
鼓動をやめなさい。どこへ行くのか知らないくせに、  
なぜ走りつづけることに、こだわるのだ？——わたし  
はもう、おまえといっしょには行かない。

\*「サウダード」は、いまそこにはないもの、過ぎ去ったもの、持って  
いないものへの、愛情と悲しみのミックスした感情。

## 4. 通りの名前 *Nome de rua*

作詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ *David Mourão-Ferreira*

作曲：アライン・オウルマン *Alain Oulman*

モウラオン＝フェレイラは名のある詩人・文学者で、  
アマーリアさんのためにファドの歌詞も書くようにな  
りました。オウルマン（ウルマン）は、リスボン市郊  
外で生まれ育ち、パリに行ったり来たりしていた音楽  
家です。アマーリアさんに新しいメロディを提供した  
作曲家です。新しいといっても、古いポルトガル語の  
伝統を追求していたので、ファドのエッセンスは最大  
限に生かされています。ただし、この曲は1960年代  
のポップ感覚を隠して使っていますので、一風変わっ  
たファドです。歌詞は歌謡ヒットをねらった？（笑）。  
謎めいた変な内容で、不思議な魅力をもった曲です。

あなたはわたしをリスボンの通りの名前と呼んだ。

人の名前というよりも、よく船の名前にされるような、  
通りの名前。

街から出てゆくときのような、にがい気持ちを少し  
こめて、なにかを探し求めている人のくるしげな顔つ  
きと、許してくれるほほえみとともに、あなたはわた  
しに、リスボンのとある通りの名前をくれた。

静かな通りの名前。夜はだれも、そこを通らない。  
そこでは嫉妬が目印の矢印、愛が目指す家。

秘密の通りの名前。夜はだれも、そこを通らない。  
そこでは、あの詩人の影が、とつぜんわたしたちを抱  
きしめる。

## 5. 百年祭のマルシャ *Marcha do Centenário*

作詞：ノルベルト・ド・アラウージョ *Norberto de Araújo* 作曲：ラウーウ・フェラオン *Raúl Ferrão*

「18世紀の半ば、ナポレオン時代のフランスで、軍隊  
の行進曲でダンスをすることが流行した。それは7月  
の革命記念日を祝うもので、火のついた棒をもってパ  
レードしたのである。この風習がポルトガルにも採り  
入れられた。ただし、たいまつのかわりに、紙の風船  
と花火が使われた。これらは17世紀に中国から伝え  
られ、すでにポルトガル全国でお祭りの野外ダンス・  
パーティーで使われていた。また、ポルトガルでは、民  
衆に愛される聖人たちの祭日がある6月が、行進曲ダ  
ンスの時期になった」（ファド研究家で歌手のヴィト  
ル・マルスナイロ氏のブログより）。

この曲の作詞者は、行進曲（マルシャ）ダンスのパ  
レードを、現代リスボンの大イベントにした（1930  
年代）ジャーナリストでリスボン文化・歴史研究家  
です。この作曲者とのコンビで、時代を超えたマルシャ  
名曲をつくりました。この曲は、リスボンをモウロ人  
（北西アフリカから侵略してきたイスラーム教徒）か  
ら奪回して8百年に当たる1947年の大ヒットです。

わたしの歌の海の上に、街ちゅうが浮かんでいる。  
通りを過ぎてゆくのは、月の裁ちくず。わたしの  
風船に落ちてくる。

リスボンを遊ばせてあげなさい。わたしを凍りつか  
せる不幸なんかない。笑いながら、うたいながら、き  
ょうわたしは頭をなくす。

「みんなが言う、わたしはお婆ちゃんだと、8世紀前  
に生まれたと。そんなこと、わたしは同意できない。  
死も、人生も、わたしのところを通りすぎなかったん  
だから。

宮廷の、とあるお小姓がわたしにファドを1曲つく  
ってくれた。とあるアラブの代官が、わたしの運命を  
読んでくれた。——恋人を持たない。痛みも心配も、  
もたない。そしていつまでも女の子でいる」

リスボンは生まれた、空のすぐそばで、信仰のゆり  
かごにすっぽり入って揺られながら。そして、河でか  
らだを洗った。アイアイ、女の子、カテドラルで  
洗礼を受けた。

もうおんなになった。そしてきょう彼女がのぞむの  
は、気の向くままにうたうこと、思い切り足を動かし  
てダンスすること。気取り屋で、ずるがしこい、アイ  
アイ、女の子。でもなんて彼女はきれいなこと。

## 6. すべてはファド *Tudo isto é fado*

作詞：アニーバウ・ナザレー *Aníbal Nazaré* 作曲：フェルナンド・カルヴァーリョ *Fernando Carvalho*

作者たちは、1940年代から活動した、歌謡ファド（イコール・ポルトガルのポピュラー・ソング）のブロです。世界のどこにもある歌謡曲と同じなのですが、ポルトガルでは音楽的にも、歌詞の内容も、ひと味ちがっていて、やっぱり「ファド」ですね。

なお歌詞は、もっと長いのですが、お芝居に使われたものなので、説明的でつまらない部分があり、アマーリアさんはそこを削除してうたいました（全歌詞を録音もしましたが）。わたしたちもアマーリアさんの判断にしがいました。

わたしの主人になりたいのなら、愛のことばかり語らないでください。ファドの話もしてください。……ファドは、わたしの言うすべてのもの。そしてまた、わたしの言えないもの。

敗れた魂たち、失われた夜たち、あやしい影たち。モウラリーアでは、ならず者がうたい、ギターたちが泣く。

愛。嫉妬。燃え尽きた灰。ともる明かり。痛みと罪。——このすべてが、世の中に存在する。このすべてが悲しい。このすべてがファド。

## 第2部

### 1. 風のつばさ *Asa de vento*

作詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues* 作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

第2部の最初の2曲は、アマーリアさんの60オのころの歌詞で、自作ばかりの2枚めのアルバム『ラグリマ（涙）』に入っていたものです。作曲者は、ポルトガル・ギター奏者で、その10年あまり前から彼女の伴奏をつとめ、このころは第1ギター、音楽監督の役をしていました。

この曲は、民謡調の3拍子ですから、ファドとは呼べないでしょう。《シャルネーカ》は、ポルトガル中部から南部にかけての、乾燥した、低い灌木がはりついている地形で、人の足が踏み込めない土地です。

わたしはシャルネーカ、わたしは山、軽やかに走るそよ風、わたしは泉に流れるつめたい水、わたしはバラの木のバラ。わたしは花の香り、わたしの考えを信じる心、恋たちの娘、痛みたちのきょうだい、わたしは悩みの母。

わたしの胸には真っ赤な小鳥が1羽いる。おぼつか

ない足取りで進んでゆく、わたしにしぼりつけられて。

わたしはシャルネーカ、わたしは山、わたしは月夜、ローズマリーの花、ジャスミンの枝、わたしは真っ赤なポピー。わたしは春の花、夏の夢、開かれた平原、人気のない浜、あなたの手を待っている。

果実になった心、熟していて緑。わたしの乾いた涙、なくならない痛み。

わたしはシャルネーカ、わたしは山、わたしは薫り高い朝、開かれた平原、人気のない浜、わたしは無人島。わたしはシャルネーカ、わたしは山、摘まれた緑の果物、シトロン草、おだやかなオリーブの木、わたしは失われた涙。

風のつばさ、運命に対抗して生きる。勇気あるバラの木、だれにもわたしは切れない。

### 2. ああわたしの甘美な狂気 *Ai minha doce loucura*

作詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues* 作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

おなじようなことばを繰り返しながら、切々と語ってゆくアマーリアさんならではの詩作の技術が、冴えています。うたうほうは、同じような繰り返しを、ちがって聞こえるように表現しなければならないので、たいへんです。

ああ、わたしの優しい狂気、ああ、わたしの甘い狂気。こいびとよ、もしこうではなかったら、夜はもっと暗いだろう。もう前から食べものがなかったの、わたしの愛は飢えている、あなたにあげてしまったキスに。わたしはもう、何を感じているかわからない。

夜はもっと夜になるだろう、こいびとよ、もしこうではなかったら、夜はもっと暗いだろう。ああ、わた

しの優しい狂気。ああ、わたしの甘い狂気、ああ、わたしの狂おしい狂気。わたしはあなたの口を見つけるにちがいない、いちばん暗い夜にも。

朝になって、しりごみするようなら、わたしの心よ、大胆になれ。わたしはあなたの口を見つけてやる、いちばん夜の夜にも。こいびとよ、もしこうではなかったら、夜はもっと暗いだろう。ああ、わたしの甘い狂気、ああ、わたしの優しい狂気、ああ、わたしの狂おしい狂気。

ああ、わたしの甘い狂気、ああ、わたしの優しい狂気、ああ、わたしの狂おしい狂気。

### 3. 腕を出して、そこから出て *Dá-me o braço, anda daí*

作詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ *João Linhares Barbosa* 曲：ジョゼ・ブランク *José Blanc*

作詞者はファド最高の民衆詩人と讃えられた人です。1920年代から、歌い手に歌詞を売ることによって生計を立てていました。長くファド・ファンのための雑誌の編集長でもありました。この歌詞のためにアマリアさんが選んだメロディの作者は、ポルトガル・ギター奏者です。今日の新しい歌詞にも使われている、なかなか人気があるメロディです。

わたしに腕をちょうだい、そこから出ていらっしゃい。わたしはあなたに寄りかかってうたいたい。月光が落ちてくるのを感じながら、夜が終わるまで寄りかかってうたいたい。

この真っ赤なバラが、わたしを、おいしそうに見せるでしょう？わたしたちは、浮かれて遊ぶ人生の3人——あなたと、わたしと、このバラと。

わたしは並んで通って行ってやる、それが楽しみ、あの女に並んでやる。ファドを歌わないあの女、あなたがわたしを裏切った、そのときのあの女。

それからみんなで郊外へ遊びに行く。わたしはこの浮かれ遊ぶ人生が大好き。夜更けに、扉のそばであなたにキスする。そして扉を閉めて、あなたを愛す。

### 4. 黒い船（暗いはしけ） *Barco negro*

作詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ *David Mourão-Ferreira*  
曲：カコ・ヴェーリョ *Caco Velho* / ピラチーニ *Piratini*

原曲はブラジルの歌で、作者たちはサンパウロで活動する歌手・ミュージシャンでした（1945年発表）。もとの題は「マイン・プレータ（黒い母）」といって、ブラジルの大農場で働いている白髪の黒い老女が、ご主人の白い赤ん坊のお守りをしていることがうたわれています。リズムは、アフリカの太鼓を思わせる《バトゥーキ》でした。1955年のフランス映画『過去を持つ愛情』の1シーンで、アマリアさんがうたうために、別の歌詞が付けられました。

朝、こわかった……砂浜に横たわり、あなたに顔がみにくいと思われるのが不安で、わたしは震えながら目を覚ました。でも、あなたの目はすぐに、そんなことはないと言った。そして太陽の光が、わたしの心に刺しこんだ。

その後、わたしは見た。岩の上に、十字架。そしてあなたの船は、光の中で踊っていた。

わたしは見た、あなたの両手。嵐に船を吹き飛ばされないように、もう切り離されてしまった帆のあいだ

で、わたしになにかを告げようと振られていた……。

浜の老女たちは言う。あんたはもう帰ってこないよ。嘘だ！ 彼女たちは頭がおかしいんだ。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべてが、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしといっしょにいると。

ガラス窓に砂を打ちつける風のなかに——うたっている水の流れのなかに——消えかけている火のなかに——ベッドのぬくもりのなかに——だれもない腰掛けのなかに——わたしの胸のうちに——あなたはいつも、わたしといっしょにいる。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべてが、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしといっしょにいると。

### 5. わたしは川で洗っていた（洗濯） *Lavava no rio, lavava*

作詞：アマリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*  
作曲：ジョゼー・フォントシュ・ローシャ *José Fontes Rocha*

アマリアさんの両親は貧しく、首都リスボンへかせぎに出てきて彼女を生んだのですが、その後仕事がかまわず、ポルトガル北東部山間の故郷に帰ってしまいました。彼女はほとんど、リスボンのおばあさんの家で育ったといえます。市内の中心に近いところですが、当時は空き地や雑草の原っぱもあって、町はずれを感じたようでした。この歌詞はそんな思い出

の重なり合いから生まれたようで、彼女が初めてつくった自作歌詞ばかりのアルバムに入っていました。そのなかで、いちばん悲しい曲です。

作曲者は長くアマリアさんの伴奏をしていたポルトガル・ギター奏者で、はじめは第2ギター、やがて第1ギターになりました。そのときの第2がゴンサウヴシュです。

川で洗たく、わたしは川で洗っていた。凍る寒さにわたしは凍っていた。川へ洗いに行くときは、ひもじい思い。おなかをすかせていた。ときには涙、わたしは泣いた。お母さんの泣くのを見て。

ときには歌も、わたしはうたった。ときには夢も、わたしは夢見た。わたしの空想の中で、いろんなことを空想した。そして泣いていることも忘れた、くるしんでいることも忘れた。

もうわたしは川へ洗たくに行かない。でも泣くことはつづいている。もうむかし夢見たことは夢に見ない、もう川で洗たくをしないのだから。それなのにどうし

て、この寒さがわたしを凍らせるのか、あそこわたしは凍っていたよりも冷たく。

ああお母さん、わたしのお母さん、どうして懐かしいのでしょうか、あそこわたしを苦しめたひもじさが、わたしを凍らせた寒さが、そしてわたしの空想が。

もうわたしたちは、おなかをすかせていない。でも、もうわたしたちは持っていない、何も持っていないがゆえの望みを。もうわたしたちは夢を見ることを知らない。もう、だましながら進んでゆく、死にたい望みをだましながら。

## 6. ラグリマ (涙) Lágrima

作詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues* 作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

全曲アマーリアさんが書いた歌詞による2枚めのアルバム (1983年) のタイトル曲でした。そのずっと以前から、病のなかで、発表などする気はなく、少しずつ断片的に書いていた詩です。こんな詩をうたうことが、アマーリアさんの生きる気力、健康の回復につながりました。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わた

しは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

ファドの時間をごいっしょに過ごしていただき  
ありがとうございました。  
これからも、皆さまのファドの感情を  
うたっていきます。  
またお会いできるのを楽しみにしております。

選曲・構成：峰 万里恵  
プログラム作成：高場 将美

インターネットをお楽しみの方は  
どうぞホームページをごらんください。

9月19日 (土)

峰 万里恵 ホームページ  
<http://mariemine.web.fc2.com/>

21日 (祝)

9月27日 (土) **FESTIVAL MEXICANA 2009**  
<http://mariemine.web.fc2.com/appendix/index.html>

皆さまのメールは、毎月10日までに届くように心がけています。開演  
バラのまち中央区それにお客様の参加を促しています。チケット  
いろいろあります。お問い合わせ先は、03-3401-6801

与野本町 (さくら通り) 第100回 第100回 第100回 第100回 第100回 第100回 第100回 第100回 第100回 第100回

※会場無料。お申し込みは、お電話またはお申し込みセンターまで。お申し込みセンターは、お申し込みセンターです。

午前11時から第2部まで。お申し込みは、お申し込みセンターまで。お申し込みセンターは、お申し込みセンターです。

ご予約はお電話またはお申し込みセンターまで。お申し込みセンターは、お申し込みセンターです。

<http://www.mariemine.com/mariemine@hotmail.co.jp>